



山中鹿介

やまなか しかのすけ

誕生 天文14年(1545年)8月15日、山中三河守満幸の次男として生れる。幼名は甚次郎。

少年期 甚次郎は生まれつき容姿に優れ、忠勇で胆力もあり、少年時代から任侠の精神を持ち合わせていた。

兄から家督相続を譲り受けた甚次郎は、「尼子のご恩を忘れずに、毛利を討って昔のご威光に返しておくれ」と言われた母の言葉を心に主家を興すことを誓う。大きな鹿の角と三日月の前立てのついた胄を譲り受けた甚次郎は、その日から山中鹿介幸盛と名乗り、山の端にかかる三日月を仰いで、「願わくば、我に七難八苦を与え給へ」と祈ったのだった。

16 歳 尼子義久に従って伯耆に入り山名氏と尾高城で戦う。山名の驍将菊地音八正茂を討ちとって一躍その勇名をあげる。

19 歳 永禄6年(1562年)山陽、山陰を次々に切り取った毛利元就は尼子十旗の第一とされる白鹿城の攻略を開始した。この時鹿介が尼子軍退去の殿軍になって見事、毛利の追撃を振り切った。

鹿介は、戦ってしばしば手柄を立て、彼の勇名は、味方のみか、敵方にも知れ渡っていった。

22 歳 永禄9年(1566年)11月28日、毛利方の兵糧攻めにより難攻不落を誇った月山富田城もついに開城。ここに、山陰の名門尼子氏は毛利軍の軍門に降った。尼子の遺臣たちは浪人となって諸国に散っていく。

24 歳 浪人となって諸国遊歴の旅をしていた鹿介は、その旅の途上、京都の東福寺で僧となっていた尼子家ゆかりの少年、孫四郎勝久に対面した。勝久の人となりを知った鹿介は、この人物こそ尼子家再興の盟主に仰ぐべしと、永禄12年(1569年)尼子の残党を糾合して主家再興ののろしを上げたのである。

25 歳 尼子勝久を奉じて尼子軍が出雲に乱入、月山富田城に迫る勢いとなった。急を聞いた毛利勢が九州より大軍をもって救援に駆けつけ戦いが始まったのは元亀元年(1570年)2月14日の早朝のことである。戦況は尼子方の勝勢で推移していたが、やがて毛利側の名将吉川元春が送った別働隊が山上の尼子本陣に突入すると戦況は逆転した。主だった尼子方の武将は次々に討ち死にし、追い詰められた鹿介は降伏を決意する。元春は鹿介の首をはねようとするが、宍戸高家らが「家臣にすれば役立つ」と助命を嘆願。元春は渋々これを承諾した。

尾高城に幽閉された鹿介はしばしばおとなしく従うふりをしていたが、ある日突然、「赤痢にかかった」と一晩中便所に通い、警護の目を盗んで便所の樋口から脱走を果たした。

その後、因幡に逃亡した鹿介は資金を得るため400人ほどの海賊を率いて略奪行為を繰り返した。しかしどんなに窮地にあっても、出雲大社や国造の財物に手を付けることはなく人の踏むべき道を誤ることはなかった。

布部山の合戦後、出雲での拠点次々に失った尼子方は一時出雲より撤退、当時日の出の勢いで中国地方をうかがっていた織田信長を頼る。信長は鹿介を「好漢である」とたいそう気に入った。

31 歳 織田と毛利の本格的な戦闘が始まったのは天正5年(1577年)である。織田方の総大将、羽柴秀吉は、播州の要衝上月城に進出した。上月城はまもなく、毛利・宇喜多連合軍三万に包囲されてしまった。秀吉は何とかして籠城中の尼子軍を救出しようとするも虚しくどうすることもできない。京にいた信長は上月城放棄を秀吉に命じ、ここに城中の尼子勢は孤立、三ヶ月後ついに落城してしまう。

32 歳 上月城から護送される鹿介が吉川元春の命を受けた刺客の手にかかったのは、天正6年(1578年)7月17日であった。

<懐徳堂とのかかわり>

鹿介没後、長男幸元(鴻池新六)は武士を廃して摂津川辺郡鴻池村で酒造業を始めて財をなし、のちに大坂に移住して豪商鴻池財閥の始祖となった。懐徳堂発起人の一人、鴻池又四郎は三代目善右衛門の弟に当たる。

<参考文献>

月山富田城尼子物語(広瀬町)
歴史探訪 戦国の武将たち(角川文庫)
新雲陽軍実記(ハーベスト出版)
戦国古城(新人物往來社)

尼子盛衰人物記(広瀬町)
月山富田城跡考(ハーベスト出版)
歴史群像49 毛利戦記(学研)
小学国語読本 巻九 昭和十二年版

